

損して「徳」とれ！



私たちはこの世に生を受けた限り、社会における自分の使命（＝当為）を見出して、人生を充実させたいと考えます。しかし日々多忙な業務や生活に追われている現実世界においては、

自分の役割などを考える暇もなく、時間だけがむなしく過ぎ去っていく方々の何と多いことでしょう。では時間にゆとりがあって自由がきくのであれば当為を見出せるのかということ、どうもそう簡単ではなさそうです。私は診療所を開設して以来、何事も自分の思い通りになる自由な生活を送っています。ところが、やりたいことを都合どおりに計画できる立場になると、逆に変なことは出来ないぞという気持ちが強くなり、むしろ慎重になって決断を下しづらくなるのです。当為を見出すということは、気持ちや時間にゆとりがあっても大変難しいことだと思います。

義という言葉に初めて接したのは、確か図書館から借りてきた『のらくろ』だったと思います。若い方々をご存じないかもしれませんが、『のらくろ』とは戦前に一世を風靡した子供むけの漫画です。時世を反映してその内容は戦争ものであり、サル対イヌの戦いの中で後者に属する主人公ののらくろが、志願兵から始まって順に位を上げていく構成になっています。その中で義という言葉が登場したのは、のらくろが「義を見てせざるは勇なきなり」と言って、正義という理念に背を向けることなく、何かに果敢に挑む場面でした。たかが子供むけの漫画でありながら、『論語』を引用するあたりに、当時の世相と作者の真剣さが読み取れます。勇気を称え卑怯な行動を戒める教訓として、子供心に強く訴えてくる場面だったため、今でも記憶に残っているのです。

「義」とは儒教における「利」の対立概念で、辞書を引くと「正しいすじみち（すなわち正義のこと）」とか「美しい礼を行う姿」などと説明されています。善美の意である「羊」に「我」が寄り添うさま、が語源のようです。とてもきれいな意味合いで、日頃の愚行を振り返ると、恥ずかしくて使うのがためらわれます。ところが白川静博士が編集された『字統』（平凡社、2007年）には、これとは別の意味の説明が為されており、その内容に感銘を受けました。「我」は今でこそ一人称を指す言葉ですが、これは仮借義（かしやぎ）と言って、本来の意味合いが消滅して、別の意味（ここでは

一人称の「私」の意味）に取って代わったもののだというのです。「我」はその形から、本来は鋸（のこぎり）を表すと説明されており、「義」は「羊に鋸を加えて截（き）り、犠牲とする意」と記されています。

白川博士の説を咀嚼するうちに、ひとつの結論に行き着きました。つまり義を貫くということは、生け贄を差し出すこと、すなわち自己犠牲を伴う行為を指しているのではないかと気づいたのです。もしそうだとすれば、為すべきことと損のしどころは表裏一体と考えられます。冒頭に述べたとおり、自らの当為を導き出すのはなかなか難しいことです。しかし、どこで損をしようかと考え方を転じてみると、なるほど意外に考えがまとまってくるのです。為すべきことを見出すには高度の知性と豊富な経験を要するのでしょうか、損のしどころを探るのはそうでもない、謂わば素人向けの手法ということでしょうか。そのかわり損というのは質と量が大切です。質が悪いと意味を為しませんし、損をし過ぎるとこちらが潰れてしまいます。どこで、どのような、そしてどのくらいの損をするのかを考えて行動していれば、少なくとも道を外すことはないように思えます。

戦国の世に義の武将と呼ばれたのは、越後の國の上杉謙信でした。謙信公はいくさに滅法強く、負け知らずだったと言われます。ところがいくさに勝っても決して領土を増やそうとはせず、さっさと越後に戻ってしまいます。どうしてなのでしょう。何年か前に、謙信公の本拠地である春日山に登ったことがあります。その見晴らしは、信長公の岐阜城と異なり、向こう側の山並みに遮られてしまいます。もしかしたら謙信公は、城から見渡せる向こうの山々までの範囲で、民のために尽くすことを心に決めていたのかもしれない、そう思えた瞬間がありました。謙信公にとっての義は、他將のいくさに手を差し伸べたとしても、決して名利に流されることなく、自分に与えられた範囲内で為すべきことを追い求めるといふ損のしどころがあったのではないのでしょうか。同じように考えれば、信玄公のピンチの折に塩を送ったという逸話も、納得できるように思えるのです。

恥ずかしながら私のような俗人でも、損のしどころさえ探っていれば、もしかしたら謙信公に劣らぬ行動が取れるのではあるまいかと、気持ちが高揚するのを感じます。